産大法学　45巻3・4号（2012. 1）

書　　評

ある保守革命家の生涯

――カールハインツ・ヴァイスマン『アルミン・モーラー：政治的伝記』を読む――

川　合　全　弘

1

「なるほど彼は、退職後も、ミュンヒェンのリービッヒ通りに面する、本と絵画に埋もれた住居で数多くの興味深い来客の訪問を受け、保守革命に対する――彼が予期しなかったような――新たな強い研究関心の存在を、満足感とともに知ることができた。しかしながらそうであるからといって、世界観的転回に対する自らの期待がむなしいものであったという事実に目を閉すことは、やはり彼としてもできなかったのである。[(1)]」

これは、モーラー晩年の姿を描く、本書末尾の一節である。評者が初めてモーラーをその自宅に訪れたのは、1993年12月、彼が73歳のときである。モーラーがワイマール期保守革命に関する名高い研究書の著者であるばかりでなく、それを範としてドイツ戦後政治の変革を構想した実践的な政治思想家でもあったこと、そしてモーラーの心中に自らの政治的構想が最終的に叶わなかったことへの苦い思いが去来していたことを、当時の評者は迂闊にも知らなかった。そうであるだけに、その後、モーラー家への訪問を重ね、モーラーの目を通してドイツ政治文化を眺めるという道程を辿った評者[(2)]にとって、上掲の一節は一入感慨深い。

（1）Karlheinz Weissmann, *Armin Mohler. Eine politische Biographie*, Edition Antaios, 2011, S. 229.

（2）評者のモーラー論については、次の拙論を参照されたい。川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム――西側結合と過去の克服をめぐって――』ミネルヴァ書房、2003年、第2章「ドイツ版ゴーリズムの提唱――アルミン・モー↗

本書の著者カールハインツ・ヴァイスマンは1959年生まれの歴史家であり、かつまた1989年に始まるドイツ再統一過程に触発されて本格的な執筆活動を開始した、いわゆる89年世代[3]の代表的論客の一人でもある。ヴァイスマンによると、彼とモーラーとの最初の直接の出会いは1984年に遡る。それ以来、彼は、2003年におけるモーラーの死に至るまで「師弟関係と呼びうる、――ただし師匠は教えることにほとんど関心を持たず、弟子もどちらかと言えば説教に従うことを嫌うという制限付きの――持続的な関係[4]」をモーラーとの間に保った。モーラーが、西側結合と反共自由主義とを基軸とする西独保守派の主流に対抗して国民主義的で非キリスト教的な保守主義を標榜する、――西独保守派の傍流とも言うべき――国民的保守派の第一世代に属したとすれば、ヴァイスマンは、再統一と欧州連合発足以後の大きく変化した状況の中で前者の遺産を継承しようとする、国民的保守派の第二世代とも呼ぶべき政治的知識人である。その意味で、本書は、共通の政治的立場に立つ著者の手になる、アルミン・モーラーの最初の本格的な政治的評伝である、と言ってよい[5]。

↘ラーの政治評論――」、53～84頁、および「あとがき」、257～260頁。

（3）89年世代とカールハインツ・ヴァイスマンの政治評論については、次の拙論を参照されたい。同書、第1章「89年世代による西側結合の批判」、27～52頁。

（4）Weissmann, *op.cit.*, SS. 8f.

（5）ヴァイスマンはすでに数篇のモーラー論を著し、またモーラー80歳記念祝賀論集の編者にもなっている。次を見られたい。Karlheinz Weissmann, “Armin Mohler“, in: *fragmente*, (1984) 75, SS. 36–44, ders., “Armin Mohler“, in: *Criticón* 15 (1985) 88, SS. 58–62, ders., Art. >>Armin Mohler<<, in: Caspar von Schrenck-Notzing (Hrsg.), *Lexikon des Konservatismus*, Graz und Stuttgart, 1996, SS. 381f., ders., “Der Regenpfeifer ist verstummt. Zum Tod des konservativen Essaysten und Politikwissenschaftlers Armin Mohler“, in: *Junge Freiheit*, Nr. 29/03, 11. Juli 2003, S. 10, und Karlheinz Weissmann/Ellen Kositza/ Goetz Kubitschek (Hrsg), *Lauter Dritte Wege. Armin Mohler zum Achtzigsten*, Edition Antaios, 2000.

なお評者は未見であるが、アルミン・モーラーの伝記には、本書以外にモノグラフィとして次のものがある。Thomas Willms, *Armin Mohler. Von der CSU zum Neofaschismus*, Köln, 2004.

2

本書におけるヴァイスマンの筆致は、平素の彼の論客ぶりから見れば、意外なほどに抑制的であり、論述の方法は努めて実証的である。他の著作では鋭く自説を展開するヴァイスマンが、本書ではもっぱらモーラー本人と関連人物とをして自ら語らせることに徹しているように見え、また若い世代に対するモーラーの影響を論じた本書最終章でも、彼自身がモーラーの衣鉢を継ぐ筆頭の弟子と言っても過言でないように思われるにもかかわらず、彼と同世代のゲッツ・クビチェックやライナー・ツィーテルマンなどへの言及があるのみで、彼自身とモーラーとの関係には全く触れられていない。また本書では、モーラーの思想と実践を再現するために、モーラーの著作のほとんど全てが引用と要約を通じて原文に忠実に紹介されているばかりか、幾つかのアルヒーフに収められたモーラー本人と関連人物との、書簡を始めとする多数の未公刊文書からの引用も行われるなど、資料に語らせる姿勢が本書の隅々まで貫かれている。(6) 本文が序文を含めて230頁足らずであるのに対して、細かい活字で記された詳細な註が50頁に及ぶ点を見ても、本書における資料重視の姿勢が窺われよう。

このような実証的方法は、実は師モーラーと共通するものでもある。モーラーは政治評論と学問的著作とを区別し、後者に関しては愚直なまでに一次資料を尊重した。(7) モーラーの伝記を著すにあたって、ヴァイスマン

（6）ヴァイスマンが本書のために利用したアルヒーフ資料は次の通りである。“Nachlaß Karl O. Paetel”, Archiv der deutschen Jugendbewebung, Burg Ludwigstein, “Nachlaß Armin Mohler” und “Nachlaß Friedrich Sieburg”, Deutsches Literaturarchiv Marbach, “Nachlaß Ervin Jaeckle” und “Nachlaß Benno Schaeppi”, Archiv für Zeitgeschichte der Eidgenössischen Technischen Hochschule Zürich, und Archivalien im Privatbesitz von Frau Edith Mohler und Karlheinz Weissmann. なお彼は、モーラーに関する資料収集の一環としてシュタージ資料にもあたったものの、見るべきものはなかった、という。Weissmann, *Armin Mohler*, S. 10.

（7）モーラーの主著『保守革命』（初版1950年）は、長期間に及ぶ継続的な資料補充のために改訂が重ねられ、最終的に次の2巻本にまとめられた。Armin Mohler, *Die Konservative Revolution in Deutschland 1918–1932. Ein Handbuch*, Dritte, um einen Ergänzungsband erweiterte Auflage, Darmstadt, 1989. 同書は、↗

が性急な“評価”よりもむしろ一次資料に基づく忠実な“紹介”を優先したことは、ひょっとしたら、激しい政治的論議に晒され続けてきたモーラーの、ともすれば見過ごされがちである堅実な学者としての一面を、――師から受け継いだ――著者自身の実証的な論述姿勢を通じて顕彰しようとする意図の表れであるのかもしれない。

3

さて本書は全14章から構成される。各章は基本的に時代順に配列されているが、他方でモーラーが生涯において取り組んだ幾つかの重要なテーマに即してそれぞれの章が纏められてもいるため、叙述はところどころで時間的に前後してもいる。

各章の見出しと概要は次の通りである。第1章「始まり」は、生地バーゼルでの青少年期を扱う。モーラーは「左翼芸術家的ミリュー」の中で育まれ、文化左翼として出発した。(8) 第2章「傭兵」は、独ソ戦を契機とするモーラーの民族主義的転回とそれに基づくある決断（ナチス武装親衛隊への入隊のための非合法な越境）、及びその顛末について述べる。後年モーラーに対して左右両翼から加えられた政治的圧迫（本書第10章の主題）が、この件を最大の根拠の一つとしたがゆえに、これに関する本書の叙述は、その反証を意図してかなり詳しい。第3章「芸術」と第7章「文学」

↘1972年以降の二次文献を収めた第2巻を別として、第1巻だけでも550頁を超える大作であるが、その6割近くの頁数がビブリオグラフィーに当てられている。この書に込められた政治的メッセージに対する賛否とは別に、従来この書が学界で高く評価されてきたことの理由の一つは、保守革命に関する浩瀚な書誌としての同書の有用性にあろう。保守革命と並ぶ、モーラーのもう一つの重要な学問的研究対象はフランス右翼である。未完に終わったとはいえ、ヴァイスマンによれば、これに関してもモーラーは苦労の末に5000冊に及ぶ関連文献を収集した、という。Vg1., Weissmann, *Armin Mohler*, S. 104.

（8）スイスの中でも左翼の政治勢力が最大であった当時の「赤いバーゼル」において、かつまた多くの亡命者の文化的影響下に形成された「特殊バーゼル的なクリマ」において、このことは言わば自然な成り行きでもあった。*Ibid.*, S. 18.

は、モデルネ芸術、とりわけ絵画と文学に対するモーラーの終生にわたる深い関心について述べる。[9] 第4章「保守革命」は、モーラーがバーゼル大学に博士学位請求論文として提出した『保守革命』の概要とそれに対する当時の反響とを説明する。モーラーが「保守革命」を博士論文のテーマに選んだことは、その後の彼の学究生活を、決して幸運とは言えない仕方で規定した。[10] 第5章「エルンスト・ユンガー」と第9章「カール・シュミット」は、モーラーがその思想形成において最も深い影響を受け、かつ私生活においても終生にわたる親交を結んだ二人の思想家とモーラーとの公私にわたる関係を対象とする。ユンガーとシュミットの関係が戦後のかなり長い期間にわたって悪化したために、[11] モーラーは両者の間で長らく板挟み

（9）モーラーの、造形芸術に対する関心と音楽に対する無関心とは、概念よりもイメージを優先する、彼の思考スタイルと深い関わりを有している。ヴァイスマンは、友人に宛てたモーラーの――キリコの絵画を評価する――次の手紙を引用している。「〔キリコにおいて芸術が再び〕まさしく正しい地震計として示されます。なぜなら、芸術においては概念というこの大いなる攪乱者が共演することはできず、全てが視覚的に、つまり直接的に明示されるからです。」*Ibid.*, S. 48.

（10）モーラーの博士論文は、どれほど学問的な体裁を採っていようと、そのテーマ自体が、いわゆる過去の克服を志向する戦後の時流の中では大きな挑発を意味せざるをえなかった。審査委員の一人カール・ヤスパースがモーラーに述べたとされる次の言葉は、挑発を受けた側の当惑の気分をよく表現しているように思われる。「あなたは、私が拒むものの全てを具現しておられる。私があなたの人柄と仕事に対して全く特別の共感を持っていることは申しておかなければなりません。お分かりですか、我々哲学教授が今どんな立場に置かれているかを。我々は言わば獅子身中の虫を飼っているのです。……よろしいですか、モーラーさん、我々の意見は次の点に関してはっきりと一致しています。つまりあなたの仕事は、魅惑的であるがゆえに今日ドイツで再びむさぼり読まれるであろう、これらの作家たちを大々的に脱ナチ化する企てを意味するのです。ドイツが政治的にもはや何ら言うべきことを持たず、全てがアメリカとロシアに掛かっていることを、もし私が知っていなければ、あなたの博士学位請求論文に対する責任を引き受けることはできなかったでしょう。それがごく限られた範囲内での狼藉にすぎないと思われるからこそ、私はそれを受理するのです。」*Ibid.*,74.

（11）これに関しては、本書の他に、次の拙稿を参照されたい。川合全弘「書簡と日記を通して見たエルンスト・ユンガーとカール・シュミットの交友史――ナチズム期の言動をめぐる両者の確執を中心として――」、『産大法学』第30巻第1号、33～66頁。

の状態に置かれた。第6章「フランス」と第8章「ドイツ・ゴーリズム」は、フランスにおけるモーラーの新聞特派員としての経験とそれに基づくゴーリストとしての自己形成、及びCSU政治家フランツ・ヨーゼフ・シュトラウスを介してゴーリスト的政治をドイツにおいて実現しようとしたモーラーの、結局は挫折に終わった試み[12]について論じる。第10章「昇進から追放へ」は、学者及び政治評論家としてのモーラーの経歴を左右した“過去の克服”の政治力学が論じられる。モーラーは、1967年2月の第1回アーデナウアー賞受賞を契機として、論壇での華々しい成功の頂点から極右という賤民的地位へと突き落とされた。モーラーの追放に寄与したこの力学の始点が左翼でなくカトリック保守派にあった、という本書の指摘[13]は、モーラーが考える保守主義と西独政治における保守本流との対立性を示唆して、興味深い。第11章「保守派知識人の組織化」は、モーラーがジーメンス財団の所長という立場で企画した講演会開催などの「文化マネージャー[14]」としての仕事や、『Criticón』誌などに依拠し、「文化左翼」に対抗する「文化右翼[15]」の組織化を目指して展開した政治評論活動を対象とする。第12章「新右翼」と第13章「唯名論」は、保守主義の理論的世界観的基礎付けを目指したモーラーの知的営為について述べる。上記の追

(12) シュトラウスに対してモーラーが抱いた期待は、CSUの全国的拡大もしくは新たな政党の結成による、ド・ゴールを範とした国民主義的な保守政治の実現であった。後年、モーラーはあるインタビューの中で自らの期待が外れたことを、次のように語った。「シュピーゲル事件の折、私は、エーミール・フランツェルと並んで、なおシュトラウスを支持した唯一の知識人でした。そのことが彼との個人的な関わりを私にもたらしました。私は彼のために2、3本の“ゴーリスト的”演説を書きましたが、彼はそれをすぐに“大西洋同盟的”なものに書き換えてしまいました。……常に私は、ヘルベルト・ヴェーナーと並んで、シュトラウスがアーデナウアー以後の第二の政治的行動人である、と考えてきました。しかしながら残念なことにそうであったのは、ヴェーナーだけでした。シュトラウスは私にいつもこう言いました。あなたの主張は正しいかもしれない。しかし、それは50％をもたらしますか。それこそが私の気懸かりなのです、と。」Weissmann, *Armin Mohler*, SS. 164f.

(13) Vgl., *ibid.*, SS. 150ff.

(14) *Ibid.*, S. 167.

(15) *Ibid.*, S. 168.

放後、政界と論壇とにおける孤立の深化に比例して、モーラーの政治思想は急進化した。「新右翼」と「唯名論」という挑発的名称は、このような実践的立場の悪化に促された、モーラーの理論的試行の表現であった。しかしながらそれは他方でまた、モーラーの保守主義と『保守革命』概念とに本来孕まれていた急進的な要素の――穏健保守派との論戦を契機とする――顕在化の帰結でもあった。第14章「晩年」では、ドイツ再統一過程に関するモーラーの独自の見解[16]、及び若い世代に対するモーラーの知的影響が論じられる。

4

以上のように、本書の叙述はモーラーの知的政治的生活の全体に及び、その論点は多岐に渡る。以下においては、モーラーにおける保守革命概念

(16)「ベルリンの壁」開放の当時、一般にヘルムート・コール首相に対するドイツ国内の期待が、良い意味でも悪い意味でも低かったことは、恐らく誰しもが認める事実であろう。そのことが、左翼の側では、“凡庸なコールの下でなら、事態が急速かつ過激な再統一へと発展することはないだろう”というある種の安心感につながり、右翼の側では、事態を速やかに再統一へと指導できないコールの鈍重さに対する苛立ちを生んだ。モーラーは、当初コールに対するこの一般的な低評価を共有したものの、事態の経過と共に、コール政権に対する自らの態度を速やかに修正した。モーラーは、コールに対する苛立ちを抑えられない盟友ローベルト・ヘップに対して、諭すようにこう語った、という。「再統一が、いかにして、誰によってかとは係わりなく、是非とも実現されなければならないということについて、我々の意見は常に一致してきた。たとえスターリンやカダフィを通じてであれ、まず再統一がなければならない。その他の全ての事柄はその後について来るのだ。今やそれがコールによって――まずはオーデル＝ナイセとイン川とまでであれ――、ともかくも実現された。彼でなければ、誰によってそれは実現されるべきだったろうか。例えば、右翼によってか。しかし右翼など、我々二人の他にはそもそも存在しないのだ。我々もコールを過小評価してきたことを認めなければならない。彼は長年無為のままに過ごし、不器用に振る舞い、普段は我々の神経を逆なでする。しかし歴史的な瞬間が訪れるや、彼は駆け出して全てを突き倒し、自らの意志を押し通す。こうして目覚めた白い巨人コールが、必要なことを成し遂げたのであり、そのことは、〔たとえヘップが認めたくなくとも〕敬意に値することなのだ。」*Ibid.*, SS. 222f.

の特質がどこにあるのか、という論点に的を絞って、本書の論評を行いたい。

この論点に関して本書に特徴的であると思われることは、評者によれば、次の２点である。

第一に、著者ヴァイスマンは、保守革命がワイマール期ドイツの様々な思想的政治的潮流を分析するための学問的な概念であるばかりでなく、モーラー自身の政治思想の核心に位置する、ある理念の表現でもあることを指摘している[(17)]。この理念は、ヴァイスマンによれば、その後モーラーによって、新右翼、唯名論、ファシズムなどの様々な表現を与えられることとなった。モーラーのこのような思想的発展にどれほどの論理的一貫性があるかは別として、少なくともモーラーにおける分析概念としての保守革命と政治理念としての保守革命との混在と両者の内的関連を指摘したことは、本書の大きな功績である。

これに関連して、ヴァイスマンは、モーラーの保守革命概念が、ワイマール期に競合した５つのナショナリスト的グループ（フェルキッシュ派、青年保守派、国民革命派、ブント派、ラントフォルク運動）全体を包

---

(17) ヴァイスマンは、次のように、このモーラー独自の理念を、『保守革命』中に見られる“円環”ないし“球”のイメージへのモーラーの言及に見出している。「〔国民革命派によって〕追求されたことは、既成のものが没落に供される、という時代診断から決然と結論を引き出すことであった。モーラーの意見によれば、ここ〔国民革命派〕において、保守革命思想の『核心』――進歩の基礎にあるイメージの完全な拒絶による、『進歩』の完全な拒絶――への最接近が達成された。このイメージとは、彼の意見によれば、直線的な歴史過程の『イメージ』であり、保守革命はそれを『円環』ないし『球』の『イメージ』と取り替えようとした。〔モーラーはこう述べている。〕『円環よりも球の方が、まさしく“気のきいた”直線に対する対抗イメージとして一層相応しい。循環論者にとって球が意味することは、どの瞬間にも全てが含まれていること、過去、現在、未来が一致することである。循環論者にとっては、球の象徴においてこそ、空虚な世界が再び満たされ、消えてしまっていた存在が空間に流れ込むのである。』」*Ibid.*, S. 68. モーラーがその著『保守革命』でニーチェに依拠して保守革命思想の「核心」を論じるこの箇所は、この引用文でヴァイスマンが示唆するように、客観的な分析のための保守革命概念をどう構成すべきかを論じたものというよりも、むしろあるべき保守革命思想に関する「モーラーの意見」を主張したものである、と言いうる。

括する上位概念として位置づけられているにもかかわらず、実のところ、モーラー自身の政治思想を反映して、当初から、エルンスト・ユンガーやエルンスト・ニーキッシュなどの国民革命派を中心に構成されていたことを、次のように指摘している。「〔保守革命に関するモーラー独自の〕こうした解釈は、モーラーにあって、最も古く、そして単純に数的にも影響力の広さの点でも重要なグループであるフェルキッシュ派が後退し、権力に最も近いところで活動する青年保守派が重要性を失い、数的に弱小で多くの点において周辺に追いやられていた国民革命派がかえって中心に登場する、という結果に至りつく。このような見方が、彼自身の個人的な好みと関わりを持っていたことは、明白である。元々、彼は『マウレタニア人の歴史』だけを描くつもりであった。[18]」ヴァイスマンは、別のところでも、同じことを次のように繰り返している。「モーラーは、彼自身にとって保守革命が単なる中立的な研究対象であるわけでないことを、決して隠さなかった。彼自身が、根本的にそれの末裔であった。……フェルキッシュ派に対する彼の嘲りと青年保守派に対する丁重な無関心とは、ナショナル・ボルシェビストや国民革命派や国民ジャコバン派に対する公然たる共感と対応している。[19]」

(18) *Ibid.*, S. 67. 引用文中の「マウレタニア人」とは、エルンスト・ユンガーが『大理石の断崖の上で』という自伝的な小説の中で、主人公の属する政治集団に与えた名称であり、モーラーが言うところの「国民革命派」に相当する。

(19) *Ibid.*, S. 196. ちなみに、初めてモーラーの『保守革命』を読んだとき、評者にはモーラーの保守革命概念に纏わるこのような事情が見えず、それゆえその後長らく国民革命派に偏重したモーラーの概念構成に無自覚のまま影響され続けた。保守革命を学問的な分析概念として効果的に用いるためには、モーラーの独特の概念構成から一旦離れることが必要であろう。なお、エトガル・ユリウス・ユングを考察対象とした次の書は、ワイマール期ドイツの政治・思想過程を分析するために、とりわけナチズムと青年保守派との交錯と異同を適切に分析するために、保守革命の概念を「穏健フェルキッシュ・ナショナリズム」として巧みに再構成することに成功した、管見の限り最初の学問的試みである。小野清美『保守革命とナチズム —— E.J. ユングの思想とワイマル末期の政治——』名古屋大学出版会、2004 年。

5

本書の第二の特徴は、ヴァイスマンがモーラーの保守革命概念に対する、とりわけ右派ないし保守派からの批判に詳細に言及し、それらとの対比を通じてモーラーにおける保守革命概念の特質を浮き彫りにしようとしている点である。以下、大別して二つの事例を見てみたい。

まず注目すべきことは、モーラーによって保守革命派として名前を挙げられた多くの人物がモーラーの保守革命概念に対して異議を唱えたこと、ヴァイスマンがこの異議の背景に、個人的な好みを反映するモーラー独自の保守革命観に対する保守革命の当事者たちの――自己理解に基づく――それなりに正当な反論のみならず、戦後的事情に基づく彼らの秘められた動機をも見出していることである。ヴァイスマンによると、例えば、ユンガー周辺の国民革命派として出発し、後にナチ党に入党したヴェルナー・ベストは、モーラーに宛てた手紙の中で、モーラーの保守革命観におけるフェルキッシュ的要素の過小評価を指摘して、次のように述べた、という。「私は、あなたが“保守革命”の“フェルキッシュ的”な要素の本質と意義とを正しく評価しておられない、という印象を持っています。この“フェルキッシュ的”な要素の重点は、“フェルキッシュ”を自称し、部分的には全く馬鹿げた思想と結合した多くの泡沫団体にあるのではありません。――実際の出来事に対する影響という点でも――本当に重要であったのは、フィヒテに結びつく精神的運動なのです。」[(20)] またかつて『ドイツ民族性』の編集者を務めたヴィルヘルム・シュターペルや『タート』の編集者を務めたハンス・ツェーラーも、モーラーの保守革命概念に対して異議を唱えた。ヴァイスマンによると、両者はともに、モーラーが保守主義と革命との不一致を見過ごし、ヨーロッパのいかなる保守主義にとってもキリスト教が不可欠の要素であることを認識できなかった、と批判した、という。[(21)]

(20) Weissmann, *Armin Mohler*, S. 72.
(21) *Ibid.*

これらの異議は、モーラーの保守革命概念が、彼自身の好みのゆえに独特の偏りを含み、当時の保守革命の現実全体を十分にフォローしていないこと、それゆえ保守革命における多様な傾向を客観的に分析するための道具として適切でないことを指摘する限りにおいて、正当なものであろう。とはいえ、これらの批判者が保守革命の研究者ではなく、むしろその当事者であり、それゆえ保守革命の概念構成が彼ら自身の政治的道徳的評価に直結する一身上の問題でもあったこと、保守革命の評価をめぐる環境が敗戦を契機として一変していたことを念頭に置くならば、これらの異議に、違った意味合いを見出すことも可能であろう。ヴァイスマンは、特にシュターペルとツェーラーがモーラーに投げかけた上述の非難の中に、まさしく「自らのかつての言説の先鋭さを世間に忘却させることを願って、古典保守的な立場に回帰した青年保守派の生き残りたち」による、自己保身の試みを見出している。[22] ヴァイスマンが引用する、次のゲルハルト・ネーベルの言葉は、かつての保守革命派にとって保守革命がもはや忘却したい過去に属し、それゆえ保守革命を再評価しようとするモーラーの努力が有難迷惑以外の何物でもなかったことを、端的に表現している。「〔モーラーは〕『労働者』にしがみ付いたままです。1930年のファシストです。[23]」

(22) *Ibid.*

(23) *Ibid.*, S. 84. ネーベル自身は保守革命派に属した人物ではない。彼は、第二次大戦中にパリのドイツ軍司令部でエルンスト・ユンガーに出会って以来、ユンガーの崇拝者となり、戦後、ワイマール期におけるユンガーの国民革命派的言説を脱急進化することによって、ユンガーの名誉回復と復権を図ろうとした。Cf., Elliot Y. Neaman, *A Dubious Past. Ernst Jünger and the Politics of Literature after Nazism*, University of California Press, 1999, pp. 73–74. ヴァイスマンによる上記の引用は、ネーベルがユンガーに宛てた、1948年8月13日付けの手紙の一節である。引用文中の『労働者』とは、もちろんワイマール期ユンガーの主著を指す。ネーベルの発言の趣旨は、ユンガーの名声を貶めかねないモーラーの頑迷な政治的立場に対する非難と取ることができるが、期せずして、この発言は、当時の保守革命思想に忠実であろうとするモーラーと、それに不快感を持ち、彼に対して距離を置こうとするユンガー（及びその代弁者ネーベル）との対照を示すものとなっている。

6

モーラーにとって保守革命は、学問的な研究の対象である前に、彼自身の政治的模範であった。[24] ヴァイスマンによれば、1970年代におけるモーラーによる「唯名論」のテーマとの集中的な取り組みは、保守革命を模範としつつ、保守主義に対して世界観的な基礎付けを与えようとする彼の理論的試みであった。[25] 以下、やや長文になるが、このテーマに関するモーラーの思索と、それに対するキリスト教保守派からの批判とについて、本書から引用することにしたい。

まず前者から見てみよう。「モーラーにとって何よりも重要であったものは、それ以上遡りようがない究極の信仰命題を他の異質な信仰命題から区別するための、信仰告白であった。〔モーラーは言う。〕『普遍論者が信じることは、現実の基礎に精神的な秩序が存在する、ということである。彼にとっては、個々人に先行し、個々人を包括する一般的なるものが存在する。他方、唯名論者にとっては、ただ個々人だけが、特殊なるものだけが存在する。彼にとって一般概念は、人間が個々人、つまり現実的なるものに対して後から与えた名前に過ぎない。』モーラーにとって根本的に重要であったことは、二つの思考様式の本質的対立を論証することであり、そのために彼が選んだものが『普遍論』と『唯名論』という、中世スコラ哲学の概念であった。……その際、彼は決定的な点で中世唯名論を超えて進んだ。つまり、当時の唯名論者によって、認識はできないものの思考の前提としては受け入れられていた世界の統一性を、モーラーは厳しく拒否したのである。彼はそのような統一性の存在可能性を否定したわけではな

(24)『保守革命』を博士論文のテーマとするに至ったモーラーの動機について、次の拙著を参照されたい。前掲拙著、61〜62頁。

(25) モーラーがとりわけ依拠したものは、国民革命派としてのユンガーの宣言書とも呼ぶべきテキスト「ナショナリズムの特権」(1927年)である。ヴァイスマンによれば、モーラーは、このテキストを貫く「唯名論的激情」に惹かれ、「このテキストが私の政治的生涯を規定した」と述べた、という。Weissmann, *Armin Mohler*, S. 202.

いものの、その有意性を否認した。というのも、それは人間にとって把握不能であるからである。それは非合理的な考え方である、という非難に対して、モーラーはこう明言する。『唯名論者の考えによれば、人間精神は自らを現実と一致させることができない。唯名論者は決して精神を軽視するわけではないが、精神が、全体として見渡すことのできない現実というジャングルの中で個々の林道を切り拓き、混沌とした現実の中から個別的なものを取り出し、それを、――展望力と自己表現力とを持ち、それ自体で完結した――フォルムへと形成する能力を持っている、とは考えないのである。』……結局、唯名論のプログラムは、デカダンスに対抗する効果的な手段を見出そうとする、モーラーの野心的な試みであった。〔モーラーは言う。〕『現代におけるあらゆる実り豊かな思想は、抽象という死の海を出て、現実的なものという――不平等、不透明、予期せぬ出来事を伴う――実り豊かな陸へと到る、隘路を通り抜けようとする試みなのである。』[26]」

ヴァイスマンは、このようなモーラーの唯名論的主張に対して、キリスト教とプラトン主義とに立脚する古典保守派トーマス・モルナールが行った批判を紹介している。彼によると、モルナールの主張は、概ね、次のようなものである。すなわち、モーラーは存在論を全く放棄してしまっている。そのような立場は、最後まで貫くことができないで終わるか、もしくは決断主義ないし美的ジェスチャーに帰結する。唯名論は、その本質に従えば、世界の制作可能性から出発するがゆえに、本来、保守派の立場でなく、むしろ左翼の立場に属する。語の本来的な意味で「現実的な」立場に立つために、人間が依拠しなければならない「存在」が否認されるならば、世界は人間の恣意に委ねられることになる。このような思想伝統は、

(26) *Ibid.*, SS. 205ff. ヴァイスマンは別の箇所でも、人間精神の限界性の自覚に自らの保守主義思想の核心を見るモーラーの次のような言葉を紹介している。「実り豊かであるのは、出自によって保守派となることでなく、『一種の“第二の出生”によって保守派となることである。人がそれを体験するのは、どんな人間も現実を全体として理解し、把握し、支配することができない、という洞察に目を開くときである。』」*Ibid.*, S. 11.

古代のソフィストから中世の唯名論者を経て、マキャベリや啓蒙主義者、そして実証主義者と現代の革命家へと到る。たとえモーラーがこの関連を否定しようとも、彼は、個人を孤立した個々人に還元してしまっている。このような孤立人が現実として承認するものは、ただ彼が自ら設定したものだけである。彼の思想は、人間に対して、現実を実際にそうであるものとは異なるものとして見るように説得するものである限り、核心において「ユートピア的」であることが分かる……[27]。

7

以上のようにヴァイスマンがモーラーに対する古典保守派的立場からの様々な批判を紹介した理由は、それらに同調して、モーラーを非難するためではない。たしかにヴァイスマンは、一方で、モーラーが保守革命に依拠して保守主義の理論的基礎付けのために――「唯名論」や「新右翼」などの名称の下に――行った幾つかの試みが、結局のところ失敗に終わらざるをえなかったことを認めている[28]。しかしながら他方で彼は、モーラーを批判する古典保守主義者、ないし戦後に古典保守主義に回帰したかつての保守革命派の主張の正当性と妥当性を決して認めているわけではない。モーラーにとってと同様、ヴァイスマンにとって、それらは、結局のところ、すでにその妥当性を喪失したがゆえに、かつて保守革命派によって、さらに遡れば夙にニーチェによって否定された、もはや維持されえない復古主義的立場にほかならない。ヴァイスマンによれば、この自覚に立つが

(27) *Ibid.*, SS. 207f.

(28) アルノルト・ゲーレンは、モーラーに共感を示しつつも、彼の理論的企てに対して距離を取った。ヴァイスマンが引用するゲーレンのモーラー宛書簡は、彼がモーラーに協力できない理由を次のよう述べている。「保守的なイデオロギーや教義といったものは存在しません。例えば『シュピーゲル』誌には書かないとか、大衆メディアに距離を置くとかといったような、具体的な表現形式を伴う、保守的態度が存在するだけなのです。」*Ibid.*, S. 173. モーラーの理論的試みに関するヴァイスマン自身の評価は、このゲーレンの立場に近いように思われる。

ゆえに、「モーラーほど激しく自らの陣営（「上品な保守派」）に論争を挑んだ者はいなかった。[29]」またそうであるがゆえに、モーラーほど戦後ドイツの保守陣営の中で孤立を余儀なくされた者はいなかった、とも言えよう。

本書を締めくくるヴァイスマンの次の文章は、モーラーの保守革命思想の本質に関する彼の――共感を含んだ――解釈を、はっきりと示しているように思われる。「モーラーの死とともに、戦後保守主義の歴史における一時代が終わった。彼は、右派知識人の誰よりも強く、この歴史に影響を及ぼした。モーラーは、その年齢ゆえに、1945年以後の展開の全てを体験した人間の一人である。……しかし他方でモーラーは、最初からこの展開に対して一定の距離を保った。それは、一方で彼のスイス人としての立場と関わるが、他方であらゆる復古的な構想に対する彼の原則的な懐疑と関わる。彼は、『諸身分』や『市民性』や『西洋』などが今なお生産的な力となりうるとは決して信じなかった。……しかしそれにもかかわらず、彼は、『グランドホテル深淵』の客となることを避け、たとえどんな状況においても何とかして実質に辿り着くことができる、という希望を持ち続けた。これが、彼の芸術と文学、政治と歴史との取り組み全体を貫く、赤い糸である。そしてこれこそが、『保守革命』の中に彼が見出した希望であったのである。[30]」

(29) *Ibid.*, S. 179.
(30) *Ibid.*, SS. 231f.